

■随想

明治の豪商〱天下の糸平〱 横浜につながる不思議な糸

牧内良平（高10回）

今年の正月、乞われて南信州新聞に「飯田と横浜をつなぐ糸」という一文を載せた。横浜夢座（五大路子座長）の芝居に、素人ながら出演した体験談を書いたもので、ついでに、かつて同座が飯田で公演した「奇跡の歌姫」渡辺はま子」の話の中で、飯田出身の代田銀太郎さん作詞の歌『ああ、モンテンルパの夜は更けて』にも触れた。

また末尾には、これも同座が演じた『富貴楼・お倉の物語』に関連して、飯田から横浜に出て成功した明治の豪商、「天下の糸平」について、機会があれば書いてみたい、と記した。飯田と横浜、両者をつなぐ不思議な糸を感じたからだ。

という訳で、本稿では、横浜で大暴れした「天下の糸平」を主役にして、「お倉の物語」を絡めながら筆を進め、明治という時代をうまく描ければいいと思っている。

『富貴楼・お倉の物語』は、4年前、横浜開港150



●まさうち・りょうへい
川路出身。ヤクザな稼業の罪滅ぼしに12年間、赤い羽根の県共同募金会会長をやっている。昨年からは県日中友好協会会長。テレビ神奈川で社長、会長の後、現在は相談役。神奈川新聞社では常務・専務。旭日小綬章受章。

年記念「エンドレス・ドリム、ヨコハマの夜明け」と銘打って、市民による実行委員会がバックアップした創作劇で、企画・主演は五大路子さん。横浜港大栈橋の特設ステージに、俳優座、文学座などに所属の錚々たる俳優たち30数人が出演し、歌え、踊れの大芝居を展開した。五大さんの夫君・大和田伸也さんも友情出演した。

「料亭政治」のはしりと言われた「富貴楼」

時は明治の初め。主人公・お倉（本名・渡井たけ）は、天保7年（1836年）、浅草生まれ。遊女、芸者として品川、吉原、新宿を渡り歩き、横浜で置屋を開業し、料理屋「松心亭」に発展させた。そして、明治6年（1873年）、市街地のご真ん中に開いたのが高級料亭「富貴楼」だった。その資金を援助した旦那が、「天下の糸平」の異名をとる田中平八その人だ。



富貴楼お倉を演ずる女優・五大路子さん

開港・開国後間もない横浜は、西洋文化の玄関口として活況を呈し、未来を切り開こうと、夢見て生きる人々で満ち溢れていた。お倉はその代表的な女傑。『横浜富貴楼お倉』（鳥居民著）によると、明治を動かした女であり、「粹で、伝法肌、肝っ玉の座ったスラリとした美人」だった、という。

そんなお倉が、女将として取り仕切った富貴楼は、日本の「料亭政治」のはしりと言われた舞台。伊藤博文、大久保利通、山県有朋、大隈重信、陸奥宗光など明治の元勳をはじめ、岩崎弥太郎、渋沢栄一など財界の大物、市川團十郎、三遊亭円朝など一級の芸能人も足繁く通った。外相、文相だった牧野伸顕は、回顧録で「政治家、役人などは富貴楼に行き、東京の情報をいろいろ聞いて

いた。それが慣習になっていた」と書いたほど。

劇でも、伊藤博文（文学座・松井工）、井上馨・西郷隆盛（同・井上高志）、坂本竜馬・大久保利通（スタッフアツプ所属・増沢望）らが登場。政治の裏舞台でのやり取り、駆け引きは追真の演技だった。お倉は、持ち前の気っ風の良さを發揮し、その仲介役、相談相手となっていた。

大隈重信が失脚した政変（明治14年）の裏舞台にお倉がいたという話が残っているが、その大隈を再び表舞台に立たせるため、大隈を伊藤博文に会わせたのもお倉だったといわれている。三井・三越の大番頭・高橋箒庵が著書に「お倉は、伊藤、井上、大隈、山県ら大官を手玉に取った」と書いたほどの器量だった。

劇中では、坂本竜馬の妻・お龍（扉座・伴美奈子）がお倉の前に現れる。竜馬亡き後、失意の中にいたお龍は、お倉の生き様の中に竜馬の影を見る。劇は、圧巻の歌と踊り、躍動の中で「竜馬みたいな女」の物語が展開していく。

『天下の糸平』こと田中平八は、劇では、控えめな役柄（俳優座・児玉泰次）。でも、実在の平八は、「明治の花柳界で一番有名だった男」と言われ、遊女時代から付き合いのあったお倉の、富貴楼開業時の金の面倒を全てみた。そこは、さすが名うての相場師。客の情報は、すべてお倉から筒抜け。時代を動かしていた政財界の重鎮

たちの会話は、「価値ある情報」として大いに役立ったことは言うまでもない。



歌え、踊れの『富貴楼』の舞台（2009年、横浜）

波瀾万丈の相場師、田中平八の生涯

さて、田中平八とはどんな人物だったのか。投資した富貴楼を情報源として、商売にうまく利用した才覚でも想像がつくが、横浜で生糸・為替相場で大儲けし、豪商と言われるほど財をなした。横浜を第二の故郷と呼び、横浜駅にほど近い旧東海道沿いの真宗大谷派・良泉寺境内に、ひと際高い墓碑がそびえ立っている。

そんな田中平八だが、飯田の魚屋に年季奉公に来たのが12歳の時だった。平八は、天保5年（1834年）、上伊那・赤穂村（現・駒ヶ根市）生まれ。生家は資産家だったが、米と綿相場で失敗して没落していた。

若いながらも商才に長けていたのだろう、3年後の15歳で魚屋を独立。19歳で藍玉を作っていた藍屋の婿養子になって、田中はると結婚。岩下嘉光・駒ヶ根シルクミュージアム名誉館長（元・信州短大学長）によると、「安政6年、横浜が開港されたという話を風の便りに聞かされ、風雲の志のあった平八としては、とても田舎で商売していることに耐え切れず、翌年、妻子を残して出奔。米、生糸を行商しながら横浜にたどり着き、生糸問屋の手代に」。

また、一説には、こんな話もある。野望に燃えた平八が、飯田からの商業流通ルートを使い名古屋に出て、相



田中平八の墓碑。筆者の2倍もある高さだ(横浜・良泉寺)

場を知り、大儲けした後、大阪でプロ相場師にひねられ、大損。剣客の門弟となり、水戸浪士の「筑波山の乱」に加わり、逮捕されて、剣を諦め、商売を、と決意したというのだ。

ペリーが来航し、開国の玄関口となった横浜、特に小生が勤務している会社周辺は「関内」と言って、居留地内に外国の公館、商館や日本人の貿易商の店が軒を連ねていた。一攫千金を狙った平八も、そこでチャンスを待っていた。

開港と同時に貿易が始まるが、日本の生糸輸出のほぼ100%は横浜からだった。だから目端が利いた平八が、横浜に憧れるのは当然。しかも当時、飯田生糸というの

はかなり有名で、高く売れた。

岩下先生の話が続ける。「300両(現在の3000万円)を元手に飯田に行つて、持ち前の弁舌を振るい、2か月後に支払いをするとの約束のもと3000両に相当する生糸を買い込んで、横浜に帰つて外国商社に売り渡し、10倍以上の大儲けをした」という。まだ30歳そこそこの青年に過ぎない平八。夢に満ちた、近代化草創期の明治初期とはいえ、その商魂のすごさは並み外れている。「糸屋平八商店」の屋号で生糸商・両替商の店を開き、洋銀相場会所を設立するなど、天性の能力を発揮、生糸だけでなく、米、お茶、為替相場も盛んに行つて財をなした平八だが、必ずしも全てが上手くいったわけではなく、波瀾万丈の相場師でもあった。

例えば、四日市から横浜にお茶を運ぶ船が難破して全財産を失ったこともあるし、イギリス人貿易商や清国人商人を相手に仕手戦を仕掛けて、負けそうになったため、偽札を作り、見せ金とすることで大損を免れたこともあった。しかし、これが露見、違法行為が外人たちに訴えられ、第二の故郷と決めていた横浜に居られなくなった。

横浜を逃れ、東京に出てからも平八の商才は発揮された。明治9年(1876年)に、田中組という銀行をつくり、同11年(1878年)、東京株式取引所を設立。



同16年（1883年）には東京米商会所（現在の東京穀物商品取引所）の初代頭取になり上場し、これも仕手戦と化して大儲けした。仲間を裏切つての儲けとの非難があったというが、その頃から平八の人生は下り坂に。肺結核に冒され、翌年、波瀾の生涯を閉じた。51歳だった。

「相場は騎虎の勢い」を座右の銘とした平八。どちらかというと、大人しく、堅実派の多い飯伊地方出身者の中で、桁外れのタイプと言えよう。血筋は争えず、田中家の子孫は鉦山業で資産をつくり、誰もが知る田中貴金属を起業した。『日本ラグビーの父』と言われる田中銀之助も一族だそうだ。東京・墨田の木母寺には、伊藤博文揮毫による巨碑「天下之糸平」が、周りを圧倒するように建っている。

伊那谷は、 日本で有数の養蚕地域だった

「天下の糸平」のことを想い出したのは、五大さんの芝居がきっかけだが、事、生糸に関しては、馴染み深い思いがある。というの

は、川路小・中学校の一带は、日本の「三大桑園」の一つと言われ、村には養蚕農家も多く、桑の実を食べて口を真つ赤にしていた少年時代が懐かしい。

それを象徴するように、天竜川の肥沃に恵まれた伊那谷は、日本で有数の養蚕地帯を形成していた。平八が、横浜で活躍していた明治期、横浜での生糸扱いは、信州産がダントツ一位だった。横浜市史（資料編）の統計によると、明治12年（1879年）の扱ひ量は62万5000斤（シェア28・5%）。信州産の多くが伊那谷によっていたものと思われる。

飯田と横浜を結ぶ、そんな有り様は、今や遠い昔の話。横浜の生糸取引所はとっくに無くなっており、シルク博物館があるだけ。輸出は、自動車、機械など工業製品が主力で、横浜名産のスカーフ（絹）は土産品程度だ。一方、伊那谷ではどうか。JA南信州によると、養蚕農家は15軒、生産量は4ト弱という。最盛期、伊那谷に何万とあった養蚕農家の面影は今はない。

一世紀という時代の変化、と言ってしまえばそれまでだが、閉塞感漂う現在の日本と、「エンドレス・ドリーム」の劇が示すような、躍動の明治期。「天下の糸平」なら、今をどう切り開くだろうか。いろいろ想像してみるが、凡人には答えが見つからない。